



TITLE:

資料17 マーモセットの口腔内味蕾  
の分布と形態の発達に伴う変化(V  
共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

山口, 京子; 原田, 秀逸; 金丸, 憲一; 笠原, 泰夫

---

CITATION:

山口, 京子 ...[et al]. 資料17 マーモセットの口腔内味蕾の分布と形態の  
発達に伴う変化(V 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2000,  
30: 135-135

ISSUE DATE:

2000-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165328>

RIGHT:

## 資料17

マーモセットの口腔内味蕾の分布と形態の  
発達に伴う変化、山口京子・原田秀逸・金丸憲一・  
笠原泰夫（鹿児島大・歯・口腔生理）

1日～9歳齢のコモンマーモセットの舌および軟口蓋の完全な10  $\mu$ m厚連続切片を作成し、各部位の味蕾の数、味孔の有無、位置、形状を記録した。

マーモセットの出生時の有郭乳頭および葉状乳頭味蕾は、茸状乳頭および軟口蓋に比べて非常に数が少なく、その後増加した。どの部位の味蕾数も出生直後から増加を続け、2ヵ月齢までにピークに達した。味蕾総数はどの齢においても茸状乳頭が最も多く、その次に多い軟口蓋味蕾数の2倍近くにも達し、2ヵ月齢で茸状乳頭1069個、軟口蓋609個、有郭乳頭（中央）530個、葉状乳頭（片側）201個であった。軟口蓋味蕾は上皮内の島状の組織中に存在し、中央部と左右両側に多く見られた。9歳齢の軟口蓋味蕾数は248個で、同齢の茸状乳頭味蕾数の1/3以下に減少した。味孔の開存率は、出生直後の軟口蓋および茸状乳頭で急速に上昇し、3日齢で軟口蓋74.8%、茸状乳頭61.9%となり、2ヵ月齢までは軟口蓋味蕾の方が高かった。また、味蕾断面の幅および高さの積は、発達に伴ってどの部位の味蕾も出生直後から増加し続けたが、2ヵ月齢以降に顕著な増加は見られなかった。

ラットに比べて胎生期間の長いマーモセットにおいても、味蕾は出生後に発育し続け、基本的にはラットと同様の傾向を示すことがわかった。一方、本実験において、アカゲザルにおける他の報告と異なり、2ヵ月齢以降では何れの部位の味蕾数も減少する傾向が認められた。これは、老化に伴う味覚感受性の変化と関連して興味深い。

## 資料18

チンパンジーとヒト幼児の粘土遊び  
：クレーン行動  
中川綾江（日本女子大・人間社会・教）

これまでのチンパンジーの粘土遊びで、1個体（クロエ）のみに「クレーン行動」が継続的に現れた。クレーン行動とは他者の腕を操作して対象に関わる間接接触のことである。この行動の意味を明らかにするため、ヒト幼児の粘土遊び行動を検討した。  
方法：

0-6才のヒト幼児約200名について6年間撮影したビデオ録画を分析した。

結果と考察：

1-1.5才の複数の幼児がごく短期間、集中的にクレーン行動を出現させた。つまり遊びの初期、1回または2回の実験内に頻繁に現れるが、その次の実験回では消滅し、かわって自分の手で触るようになった。子どもは新奇の物を提示された場合、他者の手を掴んで対象に代理に接触させ、他者がどうかかわるか行動を観察したのちに、自分で直接接触するという過程が示された。クレーン行動は粘土遊びの初期、発達段階の過渡期に現れることが分かった。ヒトでクレーン行動が出現する時期は粘土を口に入れたりしゃぶる行動が消滅し、かわって手による操作が発達する時期でもある。

人的環境で生育したクロエにクレーン行動が継続して出現した。今後、同様の環境にある他のチンパンジーに、ヒト1-1.5才に対応する行動が出現するか検討したい。